

第10回資料紹介展

徳島県下の広報誌

期間 平成7年4月25日から
7月30日まで

徳島県立文書館

つあいのごあいさつ

本館は、平成2年11月3日に開館して以来、4年半が経過しました。この間、県民の皆さんのご協力により他府県に例を見ないほど、多数の来館者を迎えることができました。本年の1月末で10万人を越えました。これはひとえに県民のご理解によるものと感謝いたしております。

本館が、文化の森の1館として設立された当初、展示は他府県施設（文書館・公文書館・資料館）なみに、年間2～3回、1期間1～2月程度の展示を計画していましたが、開館後に多数の県民の皆さんの方の来館に、急きょ計画を変更し、「開館日は必ず展示を」を合言葉に、「切れ目のない展示」を実施することにいたしました。こうした事例は、県民と県との協調のあり方の一つだと考えています。

本館の展示には、企画展と資料紹介展の2種類に分けており、今回は本館の所蔵資料を中心とした資料紹介展であります。

今回の資料展に当たり、アンケート調査にご協力をいただき、また広報誌の発行ごとに本館にご送付いただき、県下市町村の関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

なお今回の展示は、こうした市町村の地道な活動を県民の皆さんにご紹介する展示であり、決して優劣を検討するような性格を持つものではありません。

近年、徳島県におきましても都市集中の傾向が見られます。本館では常時、県下の市町村誌を閲覧室に開架しておりますので、ふるさとの近況に接するよい機会として、ぜひご利用いただければ存じます。

平成7年4月25日

徳島県立文書館長

大 和 武 生

行政と広報誌

行政にとって、広報は最も重要なポイントの一つであり、いかに立派な行政施策でも、住民に理解されて協力が得られなければ、これを遂行することは困難になります。

したがって古代から、どこの国でも、政治体制の形式に関わらず、広報には神経をつかってきました。

封建支配の考え方として有名な「知らしむべからず、依らしむべし（知らせるべきではなく、頼りにさせるのが政治の要点だ）」という言葉は、広報の持つ重みを逆の面から述べたものと考えられます。

江戸時代には、支配者からの「広報」には2つの方法がありました。一つは「達（たっし）」といわれるもので、上部の行政機関から下部の役所や役人に対する通達でありました。他の一つは「触（ふれ）」と呼ばれ、庶民まで知らされる内容のものでした。御触れは、村役人によって村中に口頭で通知され、高札場に掲示されました。

明治時代になってから、県の政策（そのほとんどが国の政策）は「管内布達」として町村に通知されました。当時、町村役場は県の下部組織でありましたので、これを役場の職員が小鐘をガランガランと鳴らして回り、町の辻々で口頭で触れてまわり、それと同時に役場の掲示板にも幾日か掲示しました。この方式は、基本的に終戦時まで続いていました。

戦後、地方自治法の交付により、地方行政は根本的に変化し、行政からの広報は、各世帯を対象として全戸配布にきりかわりました。

現在、徳島県下の市町村では、地方新聞・テレビ・ラジオ等の自治体広報コーナーを利用するとともに、ほとんどの市町村で広報誌を発行し、全戸配布を行っています。

広報誌は、行政と住民とを直接結ぶ橋渡しとして、各市町村では、それぞれの工夫を加えて発行されています。今回の展示ではそうした所を見ていただきたいと考えています。

徳島県下

県市町村	広報誌の名称	年間刊	紙型	ページ	最新号
徳島県	OUR徳島	12刊	タブロイド	4	133
徳島市	広報とくしま	24刊	タブロイド	4	469
鳴門市	広報なると	12刊	A4	16	491
小松島市	広報こまつしま	12刊	A4	16	491
阿南市	広報あなん	12刊	タブロイド	6	441
勝浦町	広報かつうら	12刊	A4	22	298
上勝町	広報かみかつ	12刊	A4	16	
佐那河内村	さなごうち	12刊	A4	12	264
石井町	広報いしい	4刊	A4	10	89
神山町	広報かみやま	6刊	A4	20	177
那賀川町	広報那賀川	12刊	A4	16	300
羽ノ浦町	リフレッシュ羽ノ浦	6刊	A4	16	35
鷺敷町	広報わじき	5刊	A4	8	
相生町	広報あいおい	12刊	A4	14	359
上那賀町	広報かみなか	4刊	A4	8	91
木沢村	広報きさわ	3～4	A4	14	70
木頭村	広報木頭	6刊	A4	22	204
由岐町	公民館報由岐	12刊	A4	10	251
日和佐町	広報ひわさ	10刊	A4	6	380
牟岐町	広報むぎ	4刊	A4	26	47
海南町	海南町公民館報	4刊	A4	14	198
海部町	公民館報海部	4刊	A4	12	106
穴喰町	館報穴喰	6刊	A4	14	212
松茂町	広報まつしげ	6刊	A4	8	80
北島町	きたじま町報	12刊	A4	10	559

この表は、市町村のアンケートをもとにし、本館の所蔵する資料を参考にて作成したものです。

の 広 報 誌

県市町村	広報誌の名称	年間刊	紙型	ページ	最新号
藍住町	広報あいずみ	1 2 刊	A 4	1 6	5 7 6
板野町	広報いたのすがた	1 2 刊	A 4	1 0	2 3 5
上板町	広報かみいた	4 刊	ワロド	1 0	1 0 4
土成町	広報どなり	4 刊	B 5	1 2	1 0 3
市場町	広報いちば	4 刊	B 5	2 0	
阿波町	広報あわ	4 刊	A 4	2 2	9 5
鴨島町	広報かもじま	6 刊	A 4	1 2	1 2 5
川島町	広報かわしま	5 刊	B 5	1 0	1 2 2
山川町	広報やまかわ	4 刊	A 4	1 6	1 0 1
美郷町	広報美郷	3 刊	B 5	6	9 0
脇 町	広報わきまち	1 2 刊	A 4	2 0	2 6 1
美馬町	広報みま	4 刊	A 4	1 0	1 1 8
半田町	広報はんだ	1 2 刊	A 4	2 8	1 4 0
貞光町	広報さだみつ	1 2 刊	B 5	8	1 0 4
一字町	広報いちう	4 刊	B 5	1 2	8 6
穴吹町	広報あなぶき	1 2 刊	A 4	1 6	1 7 4
木屋平町	こやだいら広報	5 刊	A 4	8	
三野町	広報みの	1 2 刊	A 4	1 4	2 9 6
三好町	広報みよし	1 2 刊	A 4	1 4	3 4 6
池田町	広報いけだ	1 2 刊	A 4	1 2	3 0 1
山城町	広報やましろ	1 2 刊	B 5	3 2	7 3 6
井川町	町報いかわ	1 2 刊	B 5	1 4	2 9 1
三加茂町	広報みかも	5 刊	A 4	1 4	1 3 3
東祖谷山町	広報東いや	6 刊	A 4	1 2	9 0
西祖谷山町	広報にしいや	4 ~ 6	A 4	1 0	1 0 9

○空欄は不明を示します。

広報誌の変遷

市町村広報誌にも、その時代の流行があり、形式や紙料も様々な変化が見られます。その変化のあらましを見てみましょう。

昭和40年代前半までは、素材は藁半紙でタブロイド版（B4版）というのが全盛でした。これが経済成長期には中性紙に変わっています。

40年後半には、B4版2つ折（B5版）主流になり、そのうえ表紙に写真が使われるようになりました。写真の使用は、広報誌にとって大きな転機となりました。

昭和50年代には、写真がカラー化し、文字で説明するよりも視覚にうったえる方向に、広報誌は変化してきました。

現在、広報誌は何度目かの変革期にはいりました。その第1はA4版化現象で、これは役所文書がA4版化したのに対応するもので、このためますます見やすくなってきました。第2は「OUR徳島」や「広報とくしま」のように膨大な部数の広報誌を発行する自治体が、新聞に折り込むという配布形態のためにタブロイド化したことです。

このように広報誌は、絶えず工夫が加えられました。今後とも、行政と住民を結ぶ重要なパイプとして、さらに親しみやすい方向を模索し続けることでしょう。

鬼籠野（おろの）村報

文書館の収蔵資料に、昭和11・12年の「鬼籠野村報」があります。鬼籠野は、昭和30年に合併して名西郡神山町の一部となった山村です。

同村報は、月刊8ページの本格的な刊行物で、当時の出版事情から考えるとずいぶん立派なものであります。

内容は、選挙公報・補助金申請手続・各種募集記事・行事予定など現在の広報誌に通じるものもあり、婦人会・青年団の活動報告から連載小説のようなものまであります。また国旗掲揚の成績一覧や明治天皇の御製など時代を反映する記事も数多くあります。

同村報は、昭和初期の徳島の山村の様子を如実に伝える大変貴重な資料といえるでしょう。

昭和40年代の広報誌から

◎ 村章がきまりました

木沢村では、明治百年を記念して村章を制定するため、広く図案を募集しましたところ、北は北海道から南は九州鹿児島までに至る全国各地より三百四十点におよぶ力作の応募があり、去る十二月二十五日の選衡委員会における厳正な審査の結果つぎの作品が村章として決定されました。

作者 和歌山市釘貫町二丁目 椿本信子（四十四歳）

《説明》「木」を絵画的に表現し「沢」の図案化を配

したもので、円は村民の融和団結、翼は村勢の飛躍発展を表わしています。

『広報きさわ』第1号（昭和44年1月25日）

◎ 雄乳牛の牧場できる

阿南市加茂谷町東ながせの標高約150メートルの山地に“白京が原牧場”が近く完成します。

この牧場は、今まで利用価値の低かった乳牛の雄子牛を、1年間肥育して販売しようとするもの。加茂谷農協が、7,200万円をかけて建設中のです。5ヘクタールの用地に畜舎12むねを建て、年間出荷1,000頭を目標としています。

このようなものは、全国でも4か所。もちろん四国ではここだけで農林省の雄乳牛利用促進事業として指定されています。

一方、汚水、悪臭、ハエなどの畜産公害対策にも力を入れており、2,000トンのたい肥盤や出入口に殺虫剤の噴出カーテンを作るなど、いろいろな施設を整えています。

近く、本格的な飼育事業が始まりますが、これに先きだって地元住民と公害防止協定を結ぶことになっており、新しい畜産事業の進め方として、関係者の注目を集めています。

『画報とくしま』15号（昭和48年5月）

—主な資料—

O u r 徳 島	-----	12点
画 報 と く し ま	-----	17点
鬼 籠 野 村 報	-----	5点
県 下 の 市 町 村 誌	-----	49点

—第10回資料紹介展—

徳島県下の広報誌

発 行 日 平成7年4月25日

編集・発行 徳 島 県 立 文 書 館

〒 7 7 0 徳 島 市 八 万 町 向 寺 山

T E L TEL 0 8 8 6 - 6 8 - 3 7 0 0